今月の窓

地域社会と協同組合

本号の農林金融は，「地域社会と協同組合」とのテーマで，その関係に係るいくつかの論稿を取り上げている。

当然のことながら，地域を基盤とする協同組合は，地域の社会的，経済的な条件から大きな影響を受ける。しかし，本号のいくつかの論稿でも触れているように，協同組合の活動自体が地域社会・経済に影響を与え，それを支えているという側面も無視できない。山村において，森林の荒廃を防ぎ，その資源としての価値と国土の保全を図る森林組合の活動，過疎地域において，購買・販売事業，信用事業等の提供により，地域の生活基盤を支える農協の活動，「浜の金融機関」として漁業を支え，漁村の，そして離島における金融サービスを提供し続ける漁協の活動と，その例は全国に枚挙のいとまがない。

こうした活動は，いわゆる資本の論理，市場の論理からすると全く非合理なものであろう。近年の我が国においては，市場メカニズムの徹底により経済の効率性を高めるべし，との議論が隆盛を極め，一部の農協批判も，基本的にはそうした文脈でとらえられる。資本の効率性のみを考えるのであれば，大都市圏への投資が，少なくとも短期的にはより有効なものであることは論をまたない。

しかし，市場メカニズムは，決して長期的にみた望ましい経済・社会のあり方を保証するものではない。地方の荒廃が進み，都市への人口集中が進み，その過疎と過密によって生ずる様々な問題の解決に将来どれほどの社会的コストが必要となるのか，果たしてそれが真に人々に幸せをもたらす社会の有り様なのか，短期的な資本の効率性を積み上げていく「市場メカニズム」は，それに応える術をもたない。市場メカニズムにおいて，部分的な（または短期的な）経済合理性の追求が，全体としての（または長期的な）合理性と必ずしも一致しないこと，いわゆる「合成の誤謬（ごびゅう）」は，環境問題の深刻化に見られるように，市場の規模が飛躍的に拡大した現代社会において，ますます大きな問題となっている。

協同組合運動は，初期資本主義社会の競争過程で生まれた経済的弱者の救済に思想的な源を有しており，そうした理想主義こそが，運動の大きなエネルギーとなってきた。現代の先進国においては，そうした社会的階層としての極端な貧困層は姿を消しつつあるといえようが，それをもって，協同組合主義の存在意義が低下してきたとすることは間違いであろう。協同組合主義を，上記のような，市場メカニズムが本来的に解決し得ない様々な「歪み」を是正する運動として，より幅広くとらえた場合，現在においてもその意義は少しも失われていない。

地域社会の維持，過密と過疎，環境の破壊，食の安全性，開発途上国における極端な貧困層の存在，等々，現代の市場メカニズムにおいて生じている歪みは決して小さなものではない。協同組合主義がこれらの問題にどう取り組んでいけるのか，その現代社会における存在意義は何か，このことを問い続けていくことが，協同組合主義の新たな運動エネルギーとなっていくことを期待してやまない。

（（株）農林中金総合研究所基礎研究部長　原弘平・はらこうへい）